

ソーシャルワーカーの専門的「自己形成過程」に関する質的研究

—特別養護老人ホームにおける生活相談員の「実践経験」から—

○ 社会福祉法人同和園 孫 希叔 (006969)

キーワード：生活相談員、実践経験、自己形成過程

1. 研究目的

ソーシャルワーカーの専門職としての学びは、日常の職務の中でどのようにして行われているのか。本来、ソーシャルワーカーの専門的な学びは、専門的な知識をよりどころに、実践過程における経験を積み上げる中で、実践力の向上につながっていくものである。

しかし、今日の実践現場では、多くのソーシャルワーカーが日常の職務に追われ、日々の実践過程をじっくりと振り返る時間的余裕が持てないのが現実である。また、「経験の積み重ね」がイコール「高い実践力を持っている」ことを意味することはなく、かえって経験による思いこみや凝り固まった学びの認識が、ソーシャルワーカーの実践力向上を阻害する要因になることもある。そのため、実践力向上のための様々な取り組みが、真のソーシャルワーカーの学びや個々の実践力の向上につながっていないことも少なくない。

本研究は、特別養護老人ホームに従事する生活相談員の実践経験に注目し、ソーシャルワーカーが専門職としてどのようにして自らの経験を認識し、実践に結び付けていくのかに焦点を当て、ソーシャルワーカーの専門的な力量の形成過程を明らかにすることを目的としたものである。

2. 研究の視点および方法

先行調査より、経験年数の長いソーシャルワーカーは自らの業務範囲を柔軟に捉えながら一定の評価基準をもち、ソーシャルワーカーとして組織関係者に働きかけている傾向が示された。本研究ではこの具体的プロセスを明らかにすることを分析視点とした。

分析対象は、社会福祉士の有資格者として10年以上の実務経験を有し、組織の期待を認知する立場にあり、実践上一定の力量が認められる8人の調査協力者に対して半構造面接によるデータの収集を行った。インタビュー調査は、2011年10月から2012年9月にかけて行われ、その様子をすべてICレコーダーで録音した。

データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析を行った。分析は1行ずつ読みままとまりごとにコード化を行い共通する概念名を生成した。その後、概念のまとまりをサブカテゴリーおよびカテゴリーとして形成し、概念やカテゴリーの関連性を全体関連図に書きだした。なお、分析の妥当性と信頼性を確保するために、調査協力者と報告者間で慎重に検討し、意見の一致を得られたものを採択した。

3. 倫理的配慮

本研究に協力を得られた調査協力者に対し、研究の趣旨及び方法、個人のプライバシーの保護、研究参加意思の自由等を記載した依頼書を事前に送付した。インタビューの当日、研究の目的、研究方法について書面及び口頭で説明を行い、同意書によって研究参加の同意を得た。なお、分析データはすべて個人が特定できないようコード化し、録音した音声情報は、報告者が逐語化した後、速やかに消去した。その他、施設名の匿名化をはじめ、本学会研究倫理指針に基づき研究を進めた。

4. 研究結果

分析の結果、173の意味単位が抽出され、そこから49のサブカテゴリ、14のカテゴリが生成された。このカテゴリを相互に関連付け全体のプロセスを描いていくと、ソーシャルワーカーはそれぞれの【きっかけや思い】を持ちソーシャルワークの道を選び、【基本的な土台】を備えた上で【ソーシャルワークに対する熱意】を持って実践現場に入るが、【期待とは異なる現実】で【不調和と揺らぎ】を経験しながらも、【自分のありようを振りかえる】ことで【専門職になるための努力】と新しい知識やスキルなどの【ノウハウを体得】し、【バーンアウトを経験しながら、それを乗り越える】ことによって【専門職の本質に気づく】一方、関係者に【実践の幅を広げる】よう働きかけるようになる。このような共有と期待による【つながる自己の強みの確認】は【熟練した実践観に気づく】きっかけとなり、自らの【生き方の一部になる】ことが確認できた。

ソーシャルワーカーの専門的な自己形成過程は、様々な関係性の中で、経験とともに動き、経験は決して固定しない、そして経験は自己と連動した形で重ねられ、どの側面においても相互作用が行われ、それを通してソーシャルワーカーは自己や他者に対する信頼を培い、新たな力を獲得し、自己力量を維持し専門職になっていくことが明らかになった。

5. 考察

本研究では、ソーシャルワーカーが「何を」体験しているかという内容の変化ではなく、「いかに」体験しているかという様式の変化に注目し、ソーシャルワーカーの経験世界と自己との相互作用の過程を導くことができた。すなわち、ソーシャルワーカーが実践を通して体得する経験は、自己と経験世界との相互作用そのものであり、自己は経験を受ける形で自らの認識・行動を質的に変化させ、より多義的で個別かつ包括的になり、主体性が発揮され、新たな気づきや能力を獲得し、より豊かな自己を作り出していることが明らかになった。

しかし、ソーシャルワーカーの自己形成は、具体的な実践内容と密接に関わっているため、そのプロセスの中で自己形成の過程を捉える必要がある。これを念頭におき、今後ソーシャルワーカーの自己形成過程の実証を進めていくことが求められる。